ダヤン・カーンをめぐって

— 蒙文資料の一解釈 —

萩原淳平

【要約】 ダヤン・カーンは最近多くの研究者の論争の対象となった。とくに蒙文資料のダヤン・カーンの解釈からはかなり異った結論がでた。私はダヤン・カーンをめぐる人々の行動や性格を蒙文・漢文両資料を対比しながら検討した結果、蒙文資料はダヤン・カーンの妃となったマンドカイ夫人を中心に書かれたもので、その業績を讃美するあまり、史実をゆがめる説話化が行なわれたと考える。蒙文資料によるダヤン・カーンは本名をバトムンケといったとあるが、史実のバトムンケはイスマイルに擁立されてカーン位につき、マンドカイ夫人と結婚した弟のバヤンムンケ(後のダヤン・カーン)と数年間二勢力に分れて対立した。結局一四八六・八七年にマンドカイ夫人とダヤン・カーン側が勝ちをえて、一四八八年ダヤン・カーンは正式にカーン位に就任することができた。

史林 五三巻六号 一九七〇年一月

まえがき

ダヤン・カーン Dayan qayan^① はモンゴル史上で重要な人物であるにも拘わらず資料の上で不明な点が多く、特に蒙文漢文両資料の相違が大きいために、これまでにも多くの学者によって注目されてきた。

本格的にダヤン・カーンの研究を行なったのは和田清氏

で、なかでも昭和三十四年発表した「達延汗について」^②は、氏の四十年におよぶ研究の帰結として著しいものがあった。これに対して私は昭和三十八年に「ダヤン・カーンの研究」を発表し、和田氏の説に反論し漢文資料によって、ダヤン・カーンの即位年、死亡年、治世年および事業などに大幅な修正を試みた。

これから俄かにダヤン・カーン論争が活潑化した。まず

翌三十九年に松村潤氏が私の説に対して書評の形で蒙文資料を根拠に反論し、ほぼ和田説を支持した。つづいて翌四十年七月佐藤長氏は本誌に「ダヤンカーンにおける史実と伝承」^⑤を発表した。佐藤氏はこれまでの漢文資料による研究成果を基礎にして、未解決の問題点を明確にししながら蒙文資料、とくに『蒙古源流』を中心に精細な分析を行なった。その結果、実在のダヤン・カーンについては私の説とあまり変わらないが、ダヤン・カーン前後の人物や事件を明確にし、当時のモンゴリアの情勢を明らかにしながら蒙文資料の伝承性を解明した。

これにつづいて、昭和四十年十二月と四十一年三月の二回にわたって岡田英弘氏が「ダヤン・ハガンの年代」^⑥と題して、これまでの説に反論を試みた。岡田氏は蒙文資料をより多く、^⑦十種類に及んで資料の性格を明らかにしながら、形式の面からダヤン・カーンの生年、即位年、死亡年などに論及した。

岡田氏の説には論旨の点で賛成しかねる所が多いが、それにもかかわらず、これまで難解と云うより説話的で史料として信頼性に乏しいとされてきた蒙文資料に対しての佐

藤・岡田両氏の研究は大いに学界に刺激になったと思われる。

私も最近蒙文資料を再検討する機会に恵まれ両氏の説を参考してみたが、蒙文資料に対する評価或は解釈の点では両氏の説とかなり異った結論をえた。そこで、その相違点を発表し、併せて蒙文資料によるダヤン・カーンの研究を保留にしておいた先の私の「ダヤン・カーンの研究」の後篇としての責を果したいと思う。

一 ボルクの即位と死亡年

蒙文資料によるダヤン・カーンは例えば蒙古源流では、甲申(天順八年、一四六四)に生れ、庚寅(成化六年、一四七〇)に即位し、癸卯(嘉靖二十二年、一五四三)に死ぬまで八十才の生涯を送ったというように、それがこれまでの諸研究であまりに長すぎることが明らかであるから、その生涯を究めるためには、前後の關係から問題を次第に狭めて決定する方法をとらなければならない。

ダヤン・カーンの以前については、資料のうえからも、またこれまでの研究からも、マンドグル・カーン Manduyul

dayan については大きな問題はない。マンドグルは、蒙古源流で癸未の年に即位し、五年間在位して丁亥の年に死亡した。これは十千の加えかたを誤ったので、実際には、乙未(成化十一年、一四七五)即位、乙亥(成化十五年、一四七九)死亡とするのが正しい。『アルタン・トブチ』には未年に即位、亥年に死亡とあり、更に『明実録』にも成化十五年七月庚辰(蒙古篇四・四三三頁)に、

迤北滿都魯・亂加思蘭已死

とあって、滿都魯^{マンドグル}の死亡年は、三者を一致させることができる。

問題はマンドグル以後にある。佐藤氏の研究もダヤン・カインそのものより、マンドグル以後からダヤン・カイン前後の相関関係に重点がおかれ、岡田氏の研究も、「ト赤に至る四代の紀年」に研究の中心があると見なければならぬ。しかも両者は、蒙文資料に対する解釈が異なり、結論もかなり違ったものになっている。

佐藤氏はマンドグルの後にボルク Bolqu をあげ、即位は成化十五年(一四七九)、死は成化十八年(一四八二)とする。ボルクに続いて、バトムンケ Batu mungke をあげ、

即位は成化十八年(一四八二)、死は成化二十三年(一四八七)。続いてバヤンムンケ Bayan mungke 即ちダヤン・カインをあげ、即位は成化二十三年(一四八七)、死は正徳十四年(一五一九)とする。そのあと、バルスポロト Bars bolod の即位、ボディアラク Bodi alax の即位を加え、結論として、蒙古源流のダヤン・カインは、実在したバトムンケとバヤンムンケとボディアラクの一部を加えた三代の事蹟を合採したものであるとした。

岡田氏は、蒙文資料ではマンドグル以後に、(1)ボルク親王 (2)ダヤン・カイン (3)バルスポロト (4)ボディアラクの四代が記され、漢文資料では、(1)把禿猛可 (2)伯顔猛可 (3)阿着 (4)ト赤 の四代が記されているとし、このうち、(3)と(4)は確に一致するから、(この点については私や佐藤氏もすでに明らかにした)

結局成化二十三年死の小王子はボルク親王、次の伯顔猛可王がダヤン・カインに当ることは疑ないように見える。(岡田)

四七五頁)

と結んでいる。その間に何ら蒙文・漢文資料の相関関係とか資料批判をしていない。岡田氏の論理から言えば、(1)で

ボルクが把禿猛可バトムンケにあたってしまふ。これは明らかな誤りである。また岡田氏によれば把禿猛可の存在が無視されたともいえる。これまでの研究で、和田氏ははじめ「二人のダヤン・カーン」、「謎のダヤン・カーン」などでダヤン・カーンはバトムンケ・バヤンムンケ兄弟二人の総称と云い、後にバトムンケこそダヤン・カーンなりとして最も苦心された所であり、私は漢文資料で逆に弟バヤンムンケこそダヤン・カーンなりとし、佐藤氏は、実在のダヤン・カーンはバヤンムンケであるが蒙文資料は故意か誤りか明らかでないが三人の事蹟を合せたものとした。結局これまでの研究は蒙文漢文両資料に見えるバトムンケの解釈が焦点となっていたと言っても過言ではない。岡田氏はこの点について何ら触れていないことは、特に蒙文資料を解釈する場合には、バトムンケ即ちダヤン・カーンとする説しかでないから、甚だ疑問に思われる。

いずれにしても佐藤・岡田両氏ともマンドグル以後ボルクが即位したことについては一致している。ところが、私にとつては、両者の一致したボルクに実は第一の問題があると思われる。しかもボルクの解釈の差が、その後の情勢

分析を大きく変えることになるので、ボルクについて少し詳しく述べてみよう。

まず、蒙古源流^⑧のボルクについての記述を見ると、

(1) マンドグルがボルクにジノンの称号を与え、兩人和合し、離散した六万人を収攬し安撫した。

(2) コンゴライ Qongqolai がマンドグルとボルクの離間策を施したが成功しなかった。

(3) イスマイル Ismail が両者の離間策をはかったところ、マンドグルはボルクを疑い、イスマイルを派遣した。

ボルクは逃げたがイスマイルはシギル Sigi 夫人をめぐった。

(4) ボルクとシギル夫人との間にバトムンケが生まれた。その後ボルク二十九才のときバヤンムンケが生れた。^⑨

(5) ボルク三十一才のとき、ケリエラ五人に殺された。

以上の五項目に要約することができる。特に注意すべきことはボルクの即位の記事がなく、その即位が疑われる。

さて、アルタントプチ^⑩には、ボルクについてどのような記述されているかと言うと、

そのうちボルクジノンが猪の年に大位についた。(なお一年

を経て）マンドグルとボルクの二人は六万戸を殺した。

とある。この場合に大位をカーン位と解釈することは可能であろう。しかし内容から判断すると、このころはまだボルクとマンドグルとは協力関係にあり、マンドグルの死んだ猪の年（己亥・成化十五年）のことを言ったものではなく、それ以前であり、蒙古源流の(1)の内容に相当するから大位はジノン位と解釈すべきではなからうか。

この記事につづいて、アルタントプチは、蒙古源流の(2)に相当する離間策を述べている。この中でコンゴライがマンドグルに言った言葉として、

カーンの御弟のボルクジノン様は、カーンのエケカバルトエ
ンゲンYoike qabartu jöngsen 妃を奪おうとして居られます。

など、すべてマンドグルにはカーンをつけながらボルクにはジノンをつけている。ジノンは中国語の親王から取ったものでカーンではない。その後は、蒙古源流の(3)に当る記事がやや詳しく記されている。ただその中でボルクに関係のあった人物としてベケリスン Bekersün が重要な役割を演じ、イスマイルは直接にはでてこないなどの相違があるが、根本的には大差ない。つづいては、(4)の記事がなく、

(5)の記事が虎の年としてでてくる。

以上によると、ボルクがカーン位に就いたという決定的な根拠がないことと、ボルクの記事はマンドグル在世中のものが多く、マンドグル死後に關する積極的な記事がないことである。従って佐藤・岡田両氏の蒙文資料によるボルク在位説については、幾つかの疑問が存することになる。

そこで漢文資料とくに明実録を参照して見よう。ボルクは漢文資料の李羅忽或は李羅忽太子などに当ることは、和田^①・佐藤^②の諸氏も認めるところである。そのほかに李羅と李忽、とくに李羅乃王と記されているものもあり、同一人かどうかなお疑問と思われる者が存在する。ともあれ、成化七年七月丙子（蒙古篇四・二二八頁）には、

迺北李羅忽并札加思蘭遣使臣完者都貢馬。

とあり、明に朝貢した。この時の他の一人札加思蘭は、アルタントプチのベケリスンで、彼ははじめその部下三四百人を率いてトルファンに居て、遊牧掠奪をこととし、ために西域からの朝貢使節はかれに苦しめられたという。智術あり、用兵を喜ぶと評された。天順年間には明朝にも使者を派遣したことがあったが、成化五・六年頃に東向して、

この七年七月にボルクとともに朝貢した。田村実造氏によるとこの頃からオールドスに根拠したようであるが、モンゴリア内の内戦に従事したり、時に明の辺境に侵入したり、その動きは烈しく明実録にかなり詳しく記されている、家柄としては良くはないが当代第一の実力者であった。家柄第一のボルクと結托したものであろう、両者が行動を共にしていることが多い。

これに対してマンドグルは、蒙文資料にはボルクの叔父とか兄とかと記されていて、家柄としては良い方であるらしいが、ボルクとの関係は疑わしい。明実録にはじめてその名前がでてくるのは成化九年五月庚子(蒙古篇四・三三三頁)で、命来降迤北滿都魯太子平章哈失帖木兒為広東広州前衛正千戸。とある。つづいて、成化九年十月壬申(蒙古篇四・三三七頁)の、陝西参贊軍務左都御史王越の上奏文の一節に、

九月十二日滿都魯・李羅忽・札加思蘭三酋は河套よりでて西路を分寇す。

とあり、マンドグルとボルクとベケリスンの三者がオールドスを中心に、合流し協力体制に入ったことを知る。しかるに、成化十一年の後半から事情は変わって来た。こ

の年は前述したようにマンドグルが可汗の位についた年で、その事情は、後の十五年五月庚午(蒙古篇四・四二九頁)に、

札加思蘭乃与衆商議、欲立李魯忽太子為可汗、而以己女妻之、因立己為太師。李魯忽不敢当、讓其叔滿都魯。札加思蘭乃以己女妻滿都魯為可汗、己為太師。

とあり、ボルクがマンドグルに位を譲ったことになっている。これはある程度事実を伝えたものであろう。つづいて、成化十一年八月丁亥(蒙古篇四・三七四頁)には、

迤北滿都魯・札加思蘭、板忽猛可丞相遣使臣桶哈阿刺忽平章等來朝貢馬。

とあり、マンドグルとベケリスンが明に朝貢している。同じ九月己酉(蒙古篇四・三七四頁)では、

命滿都魯王及札加思蘭進貢使臣……。

とあって、礼部ではマンドグルを王として待遇したことが知られる。同年十月己卯(蒙古篇四・三七五頁)では、

勅英國公張懋等曰、北虜滿都魯僭立名号、併吞別部。

とあり、この名号は可汗で、すでに明の君主憲宗自身マンドグルが可汗を称したことを知っていた。つづいて十二年四月丙子(蒙古篇四・三七九頁)には、監察御史薛為学等の言と

して、

近者、虜酋自称可汗、乱加思蘭亦自称太師。

とあって、マンドグル可汗、ベケリスン太師は明らかにされている。他方ボルクについては一切触れていない。ボルクが再びでてくるのは、成化十二年十月戊戌(蒙古篇四・三九五頁)で、

時有被虜者、還報、北虜讐殺、及欲遣人入貢、又云滿都魯・乱加思蘭殺李羅忽及滿都知院猛可等三人、前後事情不同。

とあり、突如としてボルクがマンドグルとベケリスンに殺された④⑤である。この内容は先に述べた蒙古源流の(3)(5)および特にアルタントプチのマンドグルとボルクとの離間策が成功し、ボルクがマンドグルとベケリスン軍に追われて、殺された事実と一致すると考えられる。また、同じ記事の「人を遣し入貢せんと欲す」というのは、事実となった。すなわち、翌十三年二月丁丑(蒙古篇四・三九九頁)というから、報告から三ヶ月あまり後には、

迤北虜酋滿都魯・乱加思蘭各遣使入貢、命太監輩平指揮楊銘、奉勅往大同、会同鎮守總兵等官、詎待來京。

とあり、マンドグルとベケリスンの使者が大同に來た。結

局朝貢は三月己巳(蒙古篇四・四〇〇頁)に実現したが、前述の情報の正確さが知られる。

つづいて、成化十四年七月辛酉(蒙古篇四・四一八頁)の兵部尚書余子俊の上奏によると、

兵部尚書余子俊奏、宣府送來降虜乃買忽至、詎知、虜酋滿都魯・乱加思蘭等事情不一、緣此虜占拋河套退遁未久、又与瓦刺幹失帖木兒猛該等讐敵、遠處沙漠、亦非本心。今聞李羅忽已為乱加思蘭所殺。

とあり、再びボルクがベケリスンに殺されたことが記されている。今度の情報提供者はモンゴル人の來降者である。その情報であれば、確実性も高く、二度までボルクの死が報ぜられたことは、その死がほぼ確実とみてよい。

さて、その後明実録では、成化十五年五月庚午(蒙古篇四・四二九頁)に、

迤北乱加思蘭為其族弟亦思馬因所殺。

とあり、ベケリスンがイスマイルに殺されたことを報じ、更に同年七月庚辰(同・四三二頁)には、

迤北滿都魯・乱加思蘭已死。

とあり、マンドグルもまた成化十五年に死亡した。

以上のボルクをめぐる事情を明実録を中心に蒙文資料で補いつつ要約すると、

成化十一年にマンドグル・ボルク・ベケリスン三者妥結してマンドグルがカーン位についた。しかし間もなく第三の有力者ベケリスンが離間策を施して第二の有力者ボルクを追討した。ボルクは直接にはケリエら五人に成化十二年に既に殺された。その際イスマイルは巧みにボルクの逃げたあとを襲い、夫人を捕えて結婚した。今度は第三の有力者となったイスマイルが第二の有力者に昇進したベケリスンを成化十五年に攻め殺した。間もなくマンドグル・カーンも死亡した。

となる。この説が成り立ちうるとすれば、佐藤・岡田両氏がマンドグル死後、ボルクが即位したという説は誤りと云うことになる。ただ、ここに一つの問題が残る。それならば何故蒙文資料はさきに死んだボルクをあたかもマンドグルの後継者を思わせるような書き方をしたのであろうか。

この問題を説明するには、マンドグルの夫人であったマンドカイセチェン・カトン Mandagai seen qatun が重要な役割を果たしていると思われるので、次にこの夫人について述べよう。

二 マンドカイ夫人の再婚説話

まずマンドカイ夫人の略歴を蒙古源流によって調べてみると、彼女はトメトのチェログバイテムル *Čorogbai tennü* 丞相の娘として生れ、マンドグルに嫁いだ。ただしマンドグルにはベケリスンの娘でエケカバルトエンゲンという第一夫人がいて、彼女は第二夫人もしくは小夫人として記されている。マンドグルと第一夫人との間には子供がなく、マンドカイ夫人との間には二人の女子が生れた。長女のボログチン *Borogčin* はベケリスンに嫁ぎ、次女のエンケ *Esike* はエオサイ・タブナング *Qonsai tabunang* に嫁いだ。

マンドグル・カーンが死ぬと、彼女はしばらくして、ボルクの子バトムンケと再婚した。その時彼女は三十三才、バトムンケは七才であったという。これは庚寅の年(成化六年・一四七〇)、この年数はこれまでの研究によって明らかにならうに誤りであるが、他との関係もあるので資料をそのまま引用しておく。以下も同じである。彼女と二番目の主人との間には、七人の子供が生れた。トロボロト *Torū bolod* とウル

スポロト Uius bolod の双生児は壬寅の年(成化十八年・一四八二)というから、結婚後十二年、主人が十九才、彼女は四十五才。次のトルト公主 Toroltu gunji とバルスポロト Barus bolod の双生児は甲辰の年(成化二十年・一四八四)というから主人が二十一才、彼女は四十七才。それにつづいてアルスポロト Arus bolod 独りが生れ、更にアルチュポロト Alku bolod とワチルポロト Wcir bolod の双生児は庚戌の年(弘治三年・一四九〇)というから、主人が二十七才、彼女が五十三才の時の子供である。この間、自ら軍を率いて出征するなど強い性格の持主である。

さて、蒙古源流・アルタントプチにはボルクの記事につづいて、このマンドカイ夫人の再婚の話が両書ともに全体を通じて非常に詳しく記されている。まづ蒙古源流の記事を要約すると、

(1) コルチン Corcin 部のウネポロト Une bolod 王がマンドカイ夫人に結婚を申し込んだ。これに対して夫人は、「カーンの子孫が絶えたならば、あなたもまたカーンの一族として結婚するに適した人でせう。しかしバトウモンケがまたテムルカダグ Temur qaday の許に生きている」と聞いている。

この者が生きている限り私は他人には嫁ぎません」と答えた。アラガチュドサンガイウルルク Alayud sanggai uring がこの答を是認して嫁しめなかった。

と、ある。次には、

(2) マンドカイ夫人はゴルロスのサダイ Sadaï に、「ウネポロト王は自分を娶ろうと幾度か申し込んで来た。いまこの子(バトムンケ)がいたった。この両者のいづれに嫁いだらよいか」と問うた。サダイは「幼児(バトムンケ)を成長するまで待つよりは、ウネポロト王に嫁いだならば、大衆のために益になるだらう」と、答えた。

サダイは夫人がウネポロト王に嫁ぐことをすすめた。更に次には、この結婚話を、

(3) サンガイウルルクの妻のジガンアガ Jigan aga にたづねた。ジガンアガは、「カサル Qasar の子(ウネポロト王)に嫁いだならば、邪道に入り、大衆より離れ、おそらくは夫人の名を喪失するであります。汗の子を守ったならば、天は必ずあなたを保護し、諸国を占拠し、おそらくは夫人の名を高くからしめるであります」と答えた。マンドカイ夫人はこの言葉を良しとして、さきのウネポロト王との結婚に賛成したサダイを責めて、「あなたは汗の子を幼とし、ウネポロト

王を大なりとし、夫人である私を寡婦として戯れて、話したのである」と言つて、一碗の熱い茶を彼の頭上になげかけた。

とある。この三話は、マンドカイ夫人が未亡人になった時、再婚の相手にウネボロトとバトムンケの二人の候補者があり、その選択について夫人が三人の意見をも参考にしながら、結局バトムンケを相手に選んだということである。

しかし、これは単なる再婚の婿選びとか、せいぜい高貴な人々の再婚話というようなものではない。その点を種々の条件にもとづいて更に詳しく述べて見よう。

再婚の第一候補者として自から名乗りをあげたウネボロト王は、蒙文資料によると、ユルチンのバガートルシグステイ Bayatur sigusteï の子とある。シグステイはモンゴルを代表する勇者として、オイラート代表と一騎打をした話が蒙古源流に興味深く記されているが、最後はオイラートのエセンに殺された。エセンがモンゴリアを統一したとき、ウネボロト王はオノンに移住して身を逃れたという。そのうちエセン王国が崩壊し、モンゴリアが分裂状態におちいると活躍の場をえた。アルタントプチによると、モラ

ン・カーン Molan qayan の誓を報いるためにマゴリカイ Magoligai 王の処へ出征したが、マゴリカイはその事を早く知って逃げてしまった。その時にウネボロト王(アルタントプチでは Noyan Bolod 王とある)の言った言葉に、

エスゲイバガートル Yesugei Bayatur (チンギス・カーンの父)はわれらの先祖である。われらの先祖はエグレン・エケ Egeien eke からテムチン Temüchin、カサル Qasar、カチユグン Qatqun, オチギン Öcigin が生れ、われわれと同じ一つの胞だ。別のスルチギン・エケ Sültigin eke からベクテル Bekter とベルゲタイ Belgetaï が生れたのだ。聖主(チンギス)は始めわれわれの祖先のカサルを導いて、ベクテルを殺したのである。その讐によっていまモラン・カーンを殺したのだ。われわれのカーンの後嗣が絶えることがあつても、カサルの後嗣は絶えることはないのだ。私は追撃しよう。

とある。これは、かつてテムチンとカサルの同母兄弟が獲物の分配で異母弟のベクテルとベルゲタイとに対して兄弟争いをして、ベクテルを殺してしまった。その間に賢母に兄弟争いをさとされたことは『元朝秘史』に劇的に記されているところである。たまたまその子孫の間で、これと似

た現象があらわれたと云うのである。すなわち異母弟別勒古台の子孫のマゴリカイ王は成化のはじめこのモンゴリアの最有力者であったが、テムチン系のモラン・カーンを一旦はカーン位に擁立したが、間もなくこれを殺してしまった。漢文資料によると成化二年（一四六六）ころのことである。^⑦テムチン系の有力後継者がいないので、古事にならってカサルの子孫のウネボロト王がテムチン系に代って、ベルゲテイ系のマゴリカイに復讐しようとした時のことを述べたものであろう。その結果はマゴリカイ王は一旦逃げたが間もなく死に、「カサルの後嗣がカーンの後裔に一つの利益をおくったということである。」と結んでいる。マゴリカイ王が死んだのは、漢文資料によると、成化四年（一四六八）の末ごろと推定される。^⑧チンギス・カーンの故事以来三百年近い年月が経過しているので、果して信頼すべきことか疑問もないわけではないが、いづれにしてもウネボロト王はチンギス・カーン元朝系ではないが一族のうちでは最も親近関係にあったカサルの子孫ということになり、家柄としてはかなり高く、年令も働き盛りと思われる。これに対して、バトムンケは家柄としてはチンギス・カーン

元朝系の子孫であるが、当時僅かに七才という。

夫人は、トメトのチョログバイテムル丞相の娘というから、最高とはいえない、しかも当時すでに三十三歳位であった。通俗の再婚話であれば身分年齢でウネボロト王の方が比較にならぬ程良縁であることは言うまでもない。なんら「迷い」もありえない。しかもなお何回か「迷った」あげく七歳のバトムンケを選んだのは、単なる家柄だけではない。

さきに引用したように、この結婚いかんによっては「大衆のために益せん」とか「カサルの子に嫁げば、邪道に入り大衆より離れ、恐らくは夫人の名を汚すであろう」などと、夫人の結婚が大衆とかかわりあいを持つ政治的な結婚であることを暗示する。また第一話のウネボロト王の申し込みに拒絶の返答をした個所には、アルタントプチによると、

わたしのカーンの所領をカサルの後裔である貴方が継承することが出来ませうか。わたしはカーンの後裔のある限り貴方のところへは参りません。

とも言っている。夫人の先夫のマンドグル・カーンの遺産

をウネボロト王に継承させるわけにはいきません。バトムンケが生きている限り、結婚はできません、ということになり、夫人の結婚はマンドグル・カーンの遺産の相続とも関係があることを示している。

いったい夫人は、マンドグル・カーンの小夫人と記され、大夫人のエケカバルトユンゲンと比べると第二夫人で、それ程権限はないように思える。しかし、大夫人はベケリスンの娘である。これは明実録の記事によれば、

札加思蘭乃以己女妻滿都魯為可汗、己為太師

とあり、まさに典型的な政略結婚で、しかもマンドグルが可汗になった成化十一年のころにあたる。従って夫人としての地位はマンドグルが死んだ成化十五年までとしても僅かに五年であり、しかもマンドグルとの間に子供がなかった。

これに対してマンドカイ夫人は、父親の身分が低かったためであろう小夫人にされたが、結婚生活は長く、マンドグルとの間に二人の娘があり、しかも長女のボログチンはすでにベケリスンに嫁ぎ、次女のエシケもコオサイタブナングに嫁いだとある。ベケリスンはすでに述べたようにマ

ンドグルの死と前後して死亡しており、少くとも成化十四・五年までに結婚していることになる。これは恐らく、先のベケリスンがマンドグルに娘を嫁がせた時、反対にマンドグルがベケリスンに娘を与えたので、互に娘を交換しあつて結合を強めたものであろう。正統派ボルクを退けてマンドグルが即位するための政略であり、人質的結婚ともいえる。ともあれ、大夫人が政略結婚で嫁いでくるまでは第一夫人として十数年の実績があつたことになる。従つて結婚歴ははるかに長い。しかも大夫人が後援とたのみ父親ベケリスンはすでに亡く、逆にマンドカイ夫人はみずから軍を指揮する程の実力をもつた夫人であれば、マンドグルの遺産は彼女に帰属したのであろうことが推察される。

普通にモンゴルの習慣として、父が死ねば父の遺産は子が受けつぐ、例えば、亡父の家の炉、帳幕その内容物・家畜・奴隷などであるが、それと同時に生母をのぞく父の妻妾も結婚と云う形で継承する。兄が死ねば、弟が兄の妻妾を結婚と云う形で継承する。これは定着社会では不倫としてしりぞけられるもので、例えば明の太祖が降服してきたモンゴル人に対して、儒教的立場からこの習慣を排除しよ

うとして禁令を出したことは私も他の論文で触れておいた^⑩。漢民族社会では最も恐れられたことが、モンゴル社会では、一般化していた。従ってマンドカイ夫人の場合も先夫マンドグル・カインに男の子があれば、先のウネボロト王とバトムンケの両候補に対して迷いもなければ問題にもならなかった。また更にボルクのような家柄力量ともにすぐれた者が生きていれば、たとえ先夫に男子がなくても問題は少なかった。事実、ボルクとマンドグルの離間策が施され、最後にマンドグルが策にかかってボルクの叛心を信じたときに、アルタントプチによれば、マンドグルは、

「そんな風ならば、僕^わに対して(ボルクが)悪心を抱いているのは本当だ、僕^わの身は健康ではないので、後継はあるまい。

僕^わが歿くなった後に后妃や嫁たちや、人民共はみんな彼(ボルク)のものとなるだらうに。僭越な考を起すなど怪しからん」と、いかった。

とある。マンドグルに男子がなければ、遺産とマンドカイ夫人は当然ボルクに渡ることを予想している。しかるにマンドグルが死亡したときには、男子なくボルクやベケリスンらの巨頭もすでに亡かったので、夫人と遺産の帰属が問

題になった。

そればかりでない。カインの未亡人の場合は単なる有形な遺産ばかりでなく、明朝に対する朝貢権や部族の支配権更にカイン位継承という無形の政治的権威までが相続される傾向があったのではなからうか。すなわち、マンドカイ夫人を獲得した者は、カインの継承者としてモンゴリアに君臨できる可能性が強かったのである。しかもこの場合、すでに巨頭なく、力関係の上でマンドカイ夫人に実力がともなっているとすれば、次のカイン決定には、逆に夫人自身の発言力が大きかった。こうなると再婚は単なる通俗的な未亡人の身の振り方でもなければ、遺産の相続だけでもない、モンゴリアにおける最も重大な政治問題であったことになる。

さて、ここまで考え至ると我々は幾つかの未亡人となった賢夫人や権力をもった夫人の例をモンゴル史の中に見出すことができる。

賢夫人としてはチングス・カインの母やツルイ未亡人、などがある。権力を持った未亡人としてはモンゴル第二代太宗窩闊台汗^{ホゴタイ}の夫人トラキナ(脱列奇那 *Turakina*)も空位

時代に監国にあたり、長老バツウらの反対をおしきって、息子のグエク (貴由 Gayul) を強引に即位せしめた。そのほかマンドカイ夫人より後になるが、アルタン・カーン Altan qayan の未亡人の三娘子^②は最も顕著な例である。

三娘子は、はじめオルドスの所へ嫁ぐことになっていたが、アルタンがその美貌と叡智を知って急に自分の妃とした。これをオルドスが怒ったので、自分の孫の把漢那吉の第二夫人に決定していた女を奪って、三娘子の代用としてオルドスに与えた。このため把漢那吉がアルタンをうらんで明朝に投降し、この事件が原因となって明蒙和平交渉が成立したという曰くつぎの人物である。

アルタンが万暦九年十二月死ぬと、その遺産と部族支配の権力、明朝への朝貢権などの大部分を三娘子は確保していた。他方アルタンの後継者の第一候補、センゲ Sengge (アルタンと第一夫人の間に生れた長子) は三娘子に結婚を申し入れたが拒否された。執拗に迫るセンゲの申し込みを三娘子は部下をひきいて西走するなどして忌避した。これらの紛争は結局、明朝の大官鄭洛の斡旋で、約十個月後に落着し、結婚が成立してセンゲは第二代順義王になるこ

とができた。しかしセンゲは僅かに三年で万暦十三年二月に病歿した。

センゲの後には、その長子のチュルゲ Cullge が順義王継承の有力候補者であった。今度は三娘子が結婚を申し入れたところが、チュルゲは三娘子があまりに年長であることを理由に拒否した。このためまた分裂の危機にひんした。このたびも結局総督鄭洛の斡旋でチュルゲは諸妾を逐い出して、三娘子との結婚が成立した。こうして空位二年あまりののち万暦十五年三月チュルゲは順義王位についた。

万暦三十五年四月チュルゲが死ぬと、チュルゲの長子は既に死亡しており、嫡長孫のポシヨクト Posiutu が第一候補となったが、三娘子の擁立するソナム Sonam が第二候補として対立し、二派に分れて戦闘による実力行使にまで行こうとした。このときも総督の涂宗濬が斡旋して、結局三十九年五月に三娘子とポシヨクトの結婚が成立した。こうして三娘子はアルタンを含めて五世代、四人と結婚して、三十九年六月二十六日に老死した。

この三娘子の例は極端で、マンドカイ夫人の場合とは事情もいささか異なる。しかしそれにしても、カーン未亡人

の再婚は時に非常に重要な政治問題となりうるものが理解される。三娘子の場合には明朝の鄧洛らが調停斡旋に成功したからよいが、モンゴル人同士ならば、時に烈しく、長期にわたる政争も生じかねない事情が存していたといえよう。

ところでマンドカイ夫人の再婚もかなり重要な意味を持つていた。殊更にウネボロト王をしりぞけて、七歳のバトムンケをえらぶ根拠が必要である。バトムンケが如何に由緒正しく血統上モンゴリア第一位にあり、彼女と結婚して次のカーンになるのにふさわしいか、そこに父のボルクの説明が必要であった。蒙文資料がマンドグルの死のあと、ボルクのことを記したのは、次のバトムンケの説明に欠かせないからであって、必ずしも年代順に記したものではない。再婚話以後においても出兵や七子を生む記事まで常にマンドカイ夫人が中心になっていて、この間は夫人の生涯に関する伝承が中心に語られている。この点は非常に重大であって、私のこれ以後の論述においても常に根底となつてくることを付け加えておく。

さて、マンドカイ夫人の再婚は客観的に見て重大とはい

いながらも、その後のモンゴリアの政治情勢に決定的意味をもつかどうかは別として、この物語に見る限り、主観的にはマンドカイ夫人は彼女の結婚の選択こそ次のカーンを決定するという誇りと自信を持つていたように受けとれる。しかもマンドカイ夫人がウネボロト王の申し出を拒んで、

バトムンケはいまテムルカダクの許にありと聞く、この者のあるかぎり我は他人に嫁がず。

とか、

心うつさず、堅き意志をもって幼児なるバトムンケをまちて

嫁がん。

などと記している所から見れば、マンドカイ夫人はこの結婚に烈しい執念と堅い決意をもって臨んだことが知られる。逆に言えば、この結婚は堅い決意をもって臨まなければならぬ程に困難な事情が背後にあったことを暗示していることも見のがすことはできない。果してこの再婚は実際に成立したであろうか。なる程、本節のはじめにその略歴を示したように蒙文資料によれば、明らかに再婚は理想的に成立し、夫人はその後も幸福に送って問題はないように見

える。

しかし、蒙文漢文両資料を詳しく分析すると、幾つかの疑問があらわれて、これらの記事はマンドカイ夫人の政治説話のある面だけを強調したもので作爲が施されたのではなからうかと考えられるに至った。それらの疑問のうち、代表的なものは、イスマイルの存在とその行動、更にイスマイルとバトムンケとの関係である。

三 イスマイルの動静とバトムンケ

イスマイルは西方出身でベケリスンの族弟と言われ、一説では毛那孩の子とも記されている。太師をねらう野心家でもあった。蒙文資料では、一説では先にも触れたように、マンドグルとボルクとの離間策に一役を演じ、マンドグルに協力したように記されているが、実際はボルク、ベケリスン鬭争の間にボルクが伴の一人と逃亡したあと、巧みにシギル夫人やその資産を没収し、シギル夫人を妻としたのであろう。当時ボルクは、すでにマンドグルにカーンの位をゆずっていたから、マンドグルには劣っていたとしても、その資産あるいは支配下の部族などはマンドグルに次ぐも

のがあったと想像される。イスマイルがそのうちのどの程度を獲得したかは明らかではないが、イスマイルはこれによってかなり有力になりえたであろう。特に、ボルクはこの頃に殺されたのであるから、掠奪的な結婚とはいえ、その夫人を妻にしたことは、ある意味では、ボルクの後継者の地位を獲得したともいえる。またボルクとシギル夫人との間には、蒙古源流によれば、甲申の年(一四六四・天順八)にバトムンケが生れ、戊子の年(一四六八・成化四)ボルク二十九歳の折にバヤンムンケが生れたとあり、このとき彼らはまだ幼く、一家をなして独立していたわけではない。

夫人や資産とともにイスマイルの手に入ったことは当然考えられる。子供たちのことはしばらくおいて、次にイスマイルが活躍するのはベケリスン追殺事件である。ボルクが消されて、モンゴリアは、マンドグルがカーン位にあり、ベケリスンが太師の地位にあって、マンドグル・ベケリスン体制が一旦は確立したが、成化十五年五月には、ベケリスンはイスマイルに殺されたことは先に述べた通りである。ベケリスンはマンドカイ夫人にとっては、当時夫のマンドグルのカーン位就任或はその後の最も重要な協力者で

あり、自分の娘の夫でもあった。従って、イスマイルとマンドカイ夫人とは全く相反する敵対的立場にあったといえる。果して、蒙文資料によると、マンドグル死後、夫人は、

悉くの大官・将兵を派遣して、擅しいままにふるまうイスマイルを討たせた。

とあり、夫人のイスマイルに対する烈しい憎しみと怒りが示されている^②。両者の戦いは、結局トゴチシグシが奇策を用いて直接イスマイルを殺したことによって、夫人側の勝利に終わった。

以上が蒙文資料にあらわれてくるイスマイルである。しかし、蒙文資料には、イスマイルに関してマンドグル死後、イスマイルが死ぬまでの間に重大な記事がはぶかれている。これは漢文資料によってのみ明らかにすることができ、イスマイルとバトムンケとの関係を中心としたものである。この点については、私がかつて和田氏の説に対する反論として、「小王子に関する一考察^②」の中で詳しく考証し、その行動についても述べておいた。ただ当時は私は殊更モンゴル人名との対比を行わず、明実録に見える

小王子だけを使用した。しかし私が「ダヤン・カンの研究」中で明らかにしたように、『万曆武功録』や『四夷考』中の「北虜考」によって、把禿猛可と伯顔猛可は兄弟であり、二人とも小王子と称し、その交替の時期は成化の末から弘治の初である。しかも、

亦思馬立把禿猛可為可汗、亦曰小王子。

から見れば、この小王子こそ、イスマイルによって擁立されたバトムンケに外ならない。ここでは論を進めるために、結論の一部だけを述べれば、明実録にはじめてバトムンケが小王子即ちカーン位について後にあらわれるのは、マンドグルの死後二年にあたる成化十七年（一四八二）五月のことである。当時バトムンケはイスマイルとともに明朝の北方防衛の最大拠点である大同方面を侵略しようとしたことが報せられ、つづいて、十八年間八月のころ、遼東辺外で、泰寧・福余を劫奪し、朵顔をも攻めた。十九年五月には、東方作戦も完了し、勢力も強大になり、バトムンケも成長して一軍を指揮するまでになったためであろう、イスマイルとバトムンケは二軍に分れ、バトムンケはモンゴリアの南部を通過して西進、イスマイルは北方を通過して西進し、西

方のある目標に向った。途中、バトムンケは二十年三月オイラートの克失と和約を結び、協力関係に入った。他方イスマイルも二十二年オイラートと連和、こうしてオールドス方面の敵に向って東と西北から狭撃陣形をしいたが、その目的を果すことができず、イスマイルとオイラートの克失は二十二年七月に、つづいてバトムンケも二十三年三月に死亡したとだけ記されている。ここでイスマイルとバトムンケ連合軍が目標とした相手は誰であったか、漢文資料では直接に明確にすることはできないが、成化二十二年六月辛卯（蒙古篇四・五七三頁）の巡撫甘肅右副都御史唐璣の上奏文によると、

虜寇出沒狂浪者多自東北而來、其寇涼永者則滿都魯部下、寇甘肅者亦思馬因等部下也。

とある。このうち、マンドグル（滿都魯）は既に成化十五年に死亡しているから、滿都魯の部下とは、実際にはマンドグルの遺産をなお保持していたマンドカイ夫人の部下を示す。すなわち、マンドカイ軍とイスマイル軍がこの地方を中心に決戦を行なわんとしていることを知る。明側に侵略したのは、決戦の準備のための食糧家畜獲得を目的とした

ものであろう。果たせるかな五日後の丙申（蒙古篇四・五七四頁）には、

虜入涼州等衛・柔遠等墩、殺掠軍民數十・牛羊等數千。

とある。涼州といえばマンドカイ夫人軍で、牛羊數千を掠奪し、その際抵抗した明軍數十人が殺掠されたことを示す。それから間もなく決戦が行なわれたのであろう。翌七月の壬申（蒙古篇四・五七六頁）には、

虜酋瓦剌克捨丹亦思馬因已死。兩部人馬散処塞下。

とあり、イスマイルとオイラート連合軍がマンドカイ夫人軍に敗れて、その敗残兵がちりぢりになって明朝の防衛線近くに逃げてきた様子がうかがえる。これは、先の蒙文資料によるマンドカイ夫人軍がイスマイルを破り殺したことにほぼ一致する。

漢文資料ではこのあと翌年バトムンケが死亡したことになる。死亡の原因は明らかにされていないが、二通りに解釈することができる。第一はたまたまバトムンケが病気に罹って死亡した。第二は、マンドカイ夫人はバトムンケがあくまで夫人に反抗したため、イスマイルを破った余勢をかって、主力ともいえるイスマイル軍を失ったバト

ムンケをも攻撃し死亡させた。恐らく後者であろう。

このように見ると、バトムンケは、かつてイスマイルがシギル夫人とその資産を吸収した成化十二年ころ、同時にイスマイルに吸収され、そのまま、マンドグルの死後（成化十五年）もイスマイルの保護のもとにあり、成長して、成化十七年ころにイスマイルによってカーン位に推戴され、マンドカイ夫人に敵対したまま、成化二十三年に敗れ死んだと解すべきである。

四 ダヤン・カーンの結婚と即位の真相

これまでにダヤン・カーンをめぐる人々、ボルクやマンドカイ夫人、イスマイルの行動および性格などを見てきたが、それによると、マンドグル死後、その遺産を確保したマンドカイ夫人が、その遺産を背景に、当時モンゴリアで最も血統が正しく、由緒の深いボルクの長子バトムンケを再婚の相手に選んだが、バトムンケはすでにマンドカイ夫人の政敵イスマイルの手にあり、結局両者は敵対し、マンドカイ夫人は勝利を得たが、バトムンケも成化二十三年死亡して、かつて切望した結婚は達せられなかった。マンド

カイ夫人が結婚しえたのは結局バトムンケの弟バヤンムンケであろう。このことは私の「ダヤン・カンの研究」における漢文資料によるダヤン・カーンはバヤンムンケ一人であると云う結論にも合致する。

それにもかかわらず、蒙文資料では、あたかも、マンドカイ夫人はバトムンケと結婚し、ダヤン・カーンはバトムンケなりと記しているのので、蒙文資料に何らか誤りもしくは作偽がなされたと思われる。この点について、ダヤン・カーンの生いたちから再び検討してみよう。

アルタン・トプチによると、ダヤン・カーンが最初にてくるとは、ベケリスンの記事のあとに、

ダヤン・カーンをバラクチンのバガイ *Bagai* と名付ける人に与えた。(蒙古源流ではイスマイルが与えたことになっている)

とある。そのあと、イスマイルがシギル夫人をとらえて結婚し、ボルクが死んだ記事などがあり、

ダヤン・カーンを悪く養っているうちに、タングートのトルンゲリ *Tulengeri* の子、テムルカダク *Temür qadaq* がきて、バガイに言うには、

「此の子を善き人に与えよ、然らざれば、我に賜えよ。」

と乞うたが、与えられなかった。テムルカダク兄弟七人は良
い紅馬に乗って、奪い取りにきた。ダヤン・カーンはバダギ
病にかかった。その病をテムルカダクの妻が、九つのドムと
白い駱駝の乳で、三個の銀碗に穴を穿つほどに撫で治癒した。
それが癒ったとき、水藻に似た七塊の病い落ちて快くなった。
ダヤン・カーンの一つの苦しみはこれである。

そののち、ダヤン・カーンをタングートのテムルカダク、
サイン・カトン *Sain gaton* の手に到らしめた。

とある。ここでダヤン・カーンはマンドカイ夫人の手に入
った。これにつづいて、マンドカイ夫人のオイラト遠征
の記事があり、その中に、「善きダヤン・カーンを絶息せ
しめて出馬した」ともある。そのあと、前記のマンドカイ
夫人の再婚話などがあり、続いて、

ダヤン・カーンはホロホル河に七歳のときに、水におちたの
を、タングートのアンジャテムル *Anja Temur* と名付ける
人がすすんで助けたと云う。そののち、ダヤン・カーン七歳
のとき、マンドカイ夫人は身をしたがわしめ、同じ猪の年に
汗位につかした。

とある。これらの説話の内容は、充分には理解できないが、
ダヤン・カーンが幼時に数奇な運命をたどった、逆に云え

ば、ダヤン・カーンとマンドカイ夫人との結婚が成立する
までに、ダヤン・カーンについて特別な説話が伝えられる
程、困難な事情があったことが知られる。これを形式的に
見ると、アルタントプチでは、ダヤン・カーンは生れたと
きから恰もダヤン・カーンと云う名前であつたように記さ
れ、例外的な一カ所を除いて、本名がでてこない。勿論ダ
ヤン・カーンは称号であつて、しかも少くともカーン位に
ついて以後につけられるべきものが、生いたちからでてき
て、本名のバトムンケとかバヤンムンケがでてこないこと
は注目すべきである。ここに何らかの作爲が行なわれたと
も考えられる。

同じように、再婚話のなかでも、蒙古源流のようにバト
ムンケを相手に扱ぶという表現はなく、ただ「カーンの後
裔」と再婚することを扱ぶと記している。

ここから見ると、アルタントプチの場合は甚だ漠然と
していて、再婚の相手とダヤン・カーンは同一人ととれ
るし、また別人ともとれなくはない。逆に言えば、再婚話
の相手はバトムンケで、実際に結婚したのは弟のバヤンム
ンケすなわちダヤン・カーンと云う推測も成り立ち得るわ

けである。この推測を一層深めるものとして、イスマイル戦の記事がある。イスマイルを殺したトゴチングシは、生き残っていたイスマイルの夫人であるシグル夫人に向って怒って云うには、

汝の夫のジノンが悪くなかったか、

汝の子のカーンは悪いだらう。

とある。シグル夫人はさきにも述べたように、ボルク・ジノンの夫人であり、バトムンケとバヤンムンケの母であり、ボルク亡きあと、イスマイルと再婚した人である。汝の夫のジノンとは先に死んだ先夫のボルクをさす。汝の子のカーンとは誰を指すだらうか。同じ夫人の子であるダヤン・カーンはこれより前に既にマンドカイ夫人の手に入り、このときまでに結婚していたから、トゴチングシに「悪い」と評価される人物ではない。とすれば、当然ほかにシグル夫人の子でカーンになっている人物で、しかもトゴチングシひいては、その主君的存在であるマンドカイ夫人にとつて「悪い」存在がいたはずである。これをさがせばバトムンケ以外にはない。また逆に悪いカーンがバトムンケとすれば、ダヤン・カーンは明らかに弟のバヤンムンケになる。

しかるに、これが蒙古源流になると表現が全く異なる。説話のテーマはほぼ同じでも、再婚話の相手は明らかにバトムンケに限定してあり、しかも、マンドカイ夫人の手に入り結婚した相手もすべてバトムンケと記されている。その結婚と即位の記事を引用すれば、

かくて、戊午の年に生れたマンドカイ夫人が御年三十三歳、

甲申の年生れたバトムンケが御年七歳の時結婚した。同じ庚寅の年に、ダヤン國を拈拠すべしとて彼をダヤン・カーンと推尊し、老夫人の前にて即位せしめ、

とある。これによれば、これまで和田氏をはじめ多くの人々がダヤン・カーンはバトムンケなりといった事になる。ただこの文中二・三の疑問がある。その第一はダヤン・カーンは大元可汗を意味することはこれまでの研究でも明らかである。しかしこの称号は非常に価値高い称号で簡単に称せられるべきものではない。この称号に類似したものとして、例えば、エセンが大元田盛(天聖)大可汗(天聖)を称したが、それは内外モンゴリアを武力統一し、名実共に支配者となつた時点で、部衆たちもその名にふさわしいことを認めただ上で、付けたものである。またマンドグルが可汗を称した

のも、それまでの十年近い空位ののち、ボルタやベケリスンと妥結し、事実上でモンゴリアの支配者となった時点で付けた。いづれも政治的軍事的実績がともなうてはじめて称号を付けることを許されるものである。

ダヤン・カーンの場合は、まだ僅かに七歳で、しかもイブラらの他の異種族有力者もいて、到底、その称号にふさわしい実績がともなっていない。かりにダヤン・カーンがその後の活躍でモンゴリアを統一した晩年に付けられたものとするれば、ある程度納得がいく。

また、ダヤン・カーンの称号がマンドカイ夫人によって付けられ、即位も僅かに老夫人の前でマンドカイ夫人によって行なわれた。これらの形式はモンゴル社会では異常ではなからうか。例えばエセンの父トゴンは可汗を称しようとして、衆に不可とされて結局可汗の位につけなかったし、ダヤン・カーンの後、その長子が若死したので弟の阿着(バルスポロト)が一時位についたが、更にその後、ト赤(ボディアラク)が位についたときも、「衆立ト赤」と記されている。モンゴル帝国時代の大クリルタイとまでは行かなくても、可汗の位につく時にはまだ部衆がかなり大き

な役割を演じていた。しかるにこのダヤン・カーンの場合はマンドカイ夫人の独演で行なわれたと解され、異常である。

これに比して、同じ蒙古源流のさらに後の部分すなわちイスマイルを打ち倒した記事のあとに、

かくて相繼いで右翼三万よりオルドス・カルガダン *Qarxa-dan* のバインジュグル・ダルカン *Bayinjūgur darqan*、ユングシャブのシルググダイ・メルゲン *Jirugadai mergen*、トゥメン・モオミンガンのドゴラン・アグルク *Dogolan ayuḡuḡ* なる、この三大臣は、三十人の友と共に来りてつぎのごとくいふ、大福ある君汗即位したまひぬ^④

とある。ここで再びダヤン・カーンはカーン位に即位したもののようであり、しかもこの度の即位こそ、クリルタイに近い形式のもとでの即位であって、私はこの即位こそ正式な即位であると考え。それならば七歳の即位は実際には何時どのような意図のもとに行なわれたのであろうか。これこそ重要な問題であろう。

さきにも触れたように、マンドグルが成化十五年ころ死んだ後、マンドカイ夫人の再婚話がたとき、ウネポロト

王の申し出を拒んで

バトムンケはいまテムルカダクの許にありと聞く、この者の
あるかぎり我は他人に嫁がず。

とか、

心うつぎず、堅き意志をもって幼児なるバトムンケをまぢて
嫁がん。

などと公言したことは事実であろう。そこにマンドカイ夫
人の烈しい決意、執念とまで思える強い願望がうかがえる。
しかも現実には、その相手のバトムンケは思うように手に
入らず、多くの困難をおかして弟のバヤンムンケだけがイ
スマイル側から手に入った。しかし夫人は直ちにバヤンム
ンケと結婚したわけではなく、バトムンケに対する執念は
強く、蒙文資料によると、まだしばらくの間はバヤンムンケ
と結婚せずにいたようで、恐らくイスマイルとの妥協政策
を行ない、バトムンケ獲得の機会を待っていたと思われる。
結局、バトムンケがイスマイルに擁立されて、小王子カ
ーンとして即位し、明らかに敵にまわり、もはや完全に結
婚できないと見極めた時点で、バヤンムンケとの結婚に踏
み切ったと考えられる。従ってこの結婚や即位、命名はあ

る意味では夫人がバトムンケと結婚することができなかつ
たという挫折感を糊塗したものであり、他面では、烈しい
気性の夫人がバトムンケ小王子に対抗するための処置であ
ったとも思われる。この結婚の時期は、当然ながらバトム
ンケ小王子の即位の時期と密接な関係がある。言うまでも
なく蒙文資料には、その手懸りはない。漢文資料でもバト
ムンケの即位について記したものはない。即位後小王子カ
ーンとして最初にでてくるのは、成化十七年五月である。
従って、バトムンケはマンドグル・カーンの死後一年十ヵ
月間に即位したことになる。可能性としては成化十五年の
後半、または十六年もありうるが、确实なところでは十七
年のはじめには即位したであろう。マンドカイ夫人とバヤ
ンムンケの結婚もその後間もなくであるから、成化十六年
の後半から、确实なところでは十七年前半位と推測される。
その際の即位もマンドカイ夫人個人としては意識的にはカ
ーンの即位として行なわれたと思われる。と言うのは、バ
トムンケは長子として、第一候補者ではあったが、長子だ
けがカーン位を継承すると云う絶対的な法則が存していた
わけではない。これに対して、バヤンムンケは弟で第二候

補者ではあったが、マンドグル・カーンの遺産を継承するとすれば、必ずしもバトムンケの条件に甚しく劣るものではない。このような意味から云えば、当時モンゴリアは、その覇権をめぐって実質的にはイスマイルとマンドカイ夫人との対立抗争状態にあったが、表面的には幼い兄弟カーンによって二分された状態にあったとも言える。

ただし、バヤンムンケの場合は形式的にも内容的にも当時のモンゴリアでは非合法的手段によったもので、公認はされない。これに反し、バトムンケ小王子の方は、多くのモンゴル人に認められ、それが伝わって明朝で小王子（カーン）として確認された。このため、バヤンムンケは結局五・六年を経過して、兄のバトムンケ小王子の死後になって、始めて第二次即位で公認されたのであろう。

さて、このように見てくると、史実とモンゴル説話とはかなり隔たりがあることを知る。モンゴル説話が何故このような表現をとるようになったかについても考察して見よう。

結論から先に言えば、モンゴル説話の中心はマンドカイ夫人一家にあり、その夫人の美化を計った結果ということ

が出来る。マンドカイ夫人は最初マンドグルの夫人で、主人がカーン位に就くという幸運にめぐまれ、ダヤン・カーンと結婚してからも、若いダヤン・カーンに代ってモンゴリアを支配したと思われる。例えば弘治元年（一四八八）から同十一年までに明朝に三回も朝貢使節を派遣した。これらは、マンドカイ夫人の政治方針を示したものであろう。

ダヤン・カーンの後半生のモンゴリア統一の基礎も夫人の実力をともなった絶大な権力によって築かれた。またダヤン・カーンとの間に七子を生み、それらを政治的軍事的指導者に育て、その後のモンゴル王国を不動のものとした。言わば、彼女こそ、まさに再建モンゴル王国の生みの親とも言える。従ってその子孫たちがマンドカイ夫人を美化したとしても何ら不思議はない。

ただ、この誇り高く、強い性格で、絶大な権力者となったマンドカイ夫人にも、生涯を通じて思うようにならなかったこと、汚点とも云うべきことが二つあった。一つは、執念を燃したバトムンケと結婚できなかったこと、他は、その正統カーンであるバトムンケに五・六年間反逆的立場を取ったあげく、攻め滅してカーン位を篡奪したことであ

る。その汚点を取り除く最も良い方法は、バトムンケとバヤンムンケを一人にしてしまうことである。その具体的な方法としては主として二つの方法がとられた。

一つは、夫人がカサル系のウネボロト王を拒否してバトムンケと結婚しようとしたことは、ある意味では高い見識を示すものであり、ひいては、この見識がチンギス・カーン—元朝後継王国を再興樹立する動機になった。従ってこの話はそのままの形で残し、その説話の主人公のバトムンケと結婚できたことにして、実際に結婚したバヤンムンケをダヤン・カーンの称号を媒介にして結びつけ、出生その他の都合の悪い記事を削除して、恰もバトムンケ即ちダヤン・カーンにすると云う強引な方法であり、これが蒙古源流となって残された。

他の一つは、それ程強引ではなく、ただ、バトムンケとバヤンムンケの本名を全部削除して、カーンの後継者とか、ダヤン・カーンと云う称号のみを残し、漠然とダヤン・カーン一人が存在するかのように変える方法がとられた。これがアルタン・トプチとなって残された。

このように、マンドカイ夫人の生涯は、史実が美化と云

う方向で次第に昇華されて、今日見られるような一家を中心とした説話に変化していった。ただ美化にも限界があったためであろう、後人をして疑問をいだかせたり、或は真実を伝える事実を残してしまった。例えば、蒙古源流がダヤン・カーンの二度の即位を示唆し、アルタントプチはダヤン・カーンが生れた時の名前のような記述をまぬがれず、また一見疑惑をいだかせないように見えて、論理的に二人のカーンの存在を示唆する「汝の子のカーンは悪いだろう」などの記述を残してしまった。更に満漢文の蒙古源流ではバヤンムンケの名前をその出生のときだけではあるが残してしまった。

これに対して明朝側には、それらの説話が作りだされる以前に、断片的ではあるが、ほぼ史実と同時代的に真相が伝えられてしまった。以上がダヤン・カーンに関する諸資料に対する私の解釈と評価の概要である。

五 ダヤン・カーンの即位・死亡年

などについての補足

ダヤン・カーンの正式即位の年次については、蒙文資料

では明確にしえない。漢文資料では、私のさきの論文でも触れたように、萬曆武功録には、

弘治元年、虜可汗把禿猛可死、弟伯顔猛可嗣。

とあるが、萬曆武功録は内容的にはすぐれた記事が多く含まれているにもかかわらず、年次では一・二年の誤差があることも多く、信頼性に欠ける、そこで、私は明実録の成化二十三年(一四八七)三月癸卯の、

巡撫遼東都御史劉滂等奏、卜蘭罕衛与泰寧衛夷人伝報、小王

子已死。

と、同じ弘治元年(一四八八)五月乙酉の、

先是、北虜小王子率部落、潛住大同近辺。至是、奉番書求貢、書辞悖慢、自称大元大可汗。

の二つの資料から、前小王子(バトムンケ)は一四八七年死亡、ダヤン・カーン小王子は一四八八年即位とのみ記しておいた。

しかるに、私の後に発表された佐藤・岡田両氏とも結局私と全く同じ明実録の資料にもとづきながら、一四八七年即位とした。ここに僅かではあるが一年の差を生じた。これについては、私の説明が不充分であったことは認める、

確かに一四八七年即位の可能性のあったことを付け加えるべきであった。しかし、現在までに確めうる資料では、一四八八年即位の方がより正確であると云う基本的な立場は変らない。

これが、当時の明朝のような漢人定着民族王朝であるならば、皇位継承法は堅く定っていて、特別な事情のない限り、前皇帝が三月に死ねば、その記事だけで次の皇帝が同年中に即位したと断定して、まず誤りはない。

北アジア遊牧社会では事情は異なる。初代チンギス・カーンの死後、二代オゴタイの死後、三代ゲクの死後など何れも末子とか前皇后(カトン)が監国摂政をして、空位一年あるいは二年位は通常のことである。近い所で、マンドグル・カーンの前には十年近い空位があり、ダヤン・カーンの死後にもカーン位継承紛争があった。先にあげた順義王家の場合でも空位時代が常にあった。

このように遊牧社会では、カーン位継承に確固とした規定がなく、烈しい紛争がないまでも、常に一定期間が空費される。ダヤン・カーンの場合、バトムンケの死を待っていた事情は察せられるが、部族長級の参集を必要とす

る集会には、まだイスマイルやバトムンケの殘党が散在していたであろうから、急に參集することには危険がともなつたであろう。また朝貢は、マンドカイ夫人がマンドグル・カーン時代に經驗し、その遺産として朝貢權の行使を待ち望んでいたことも事實であろう。ダヤン・カーンの正式即位をまっぴらに直ちに年来の望みを達しようとしたとすれば、ダヤン・カーンの即位は一四八八年の公算も大きい。

いづれにしても、遊牧社会では、前カーンが死んだからと言って、その年に即位したという確実な積極的根拠がなければ、即位を果たした事が明確になつた年をもって即位年とすべきであると云うのが私の考えである。

次に死亡年についても付け加えておこう。私は先の論文で、ダヤン・カーンの死は、漢文資料を分析すると、正徳十四年（一五一九）前半か、同十五年後半かの二説をあげておいたが、後者については、漢文資料に否定する積極的根拠がないままに、僅かの可能性を認めただけで、前者が圧倒的に有力であると強調したつもりである。

佐藤氏は蒙古源流にダヤン・カーンは癸卯（嘉靖二十二年、一五四三）死亡とある点に注意し、癸卯は己卯（正徳十四

年）の誤りとして正徳十四年説を取った。同書に十二年違いは多く見られるが二十四年違ひはここ一個所であつて決定的とはいいかねるが、蒙文漢文兩資料から見ても、正徳十四年死亡ではば間違いないと思われる。

これに対して、岡田氏はアルタントプチなどの蒙文資料の在位年から算出して、ダヤン・カーン死亡年は嘉靖三年（一五二四）とする。岡田氏によれば、一方では「アルタントプチに採用されたトメット所伝の王名表は異姓の可汗を含まないがそれ以外の各代につき即位の年の十二支、在位年数、卒年の十二支を記したもので、最も正確であり」（四七二頁）と述べながら、ダヤン・カーンに関しては、猪の年七才で即位した事実について何ら触れることなく、また四十四才死亡をも否定しながら、ただ在位三十七年のみを採用し、しかも即位年は漢文資料によると言う方法をとっている。またガンガイソ・ウルスハルも在位年数のみは正しいものとして採用すると述べながら、教行さきにダヤン・カーンのあと、ボディアラク・カーンの所では「四十三年在位は勿論誤りである」としている。岡田氏の言うことは、論理的に矛盾する所が少くなく、何れが正しいのか

判断しかねる。

のみならず、仮りにその在位年数が正しいとしてもこれら蒙文資料の即位年の基準は私の所謂第一次即位をさし、漢文資料は第二次即位をさす。従って基準の異なる異質の資料を充分批判せずには漢文資料の即位年に蒙文資料の在位年を加えて死亡年を算出することは、その方法自体に危険があるとしなければならぬであろう。

また岡田氏は、

要するに根拠とし得るのはアルタン・トブチのダヤン・ハガ
ン三十七年（正しくは三十八年）、ボデイ・アラク・ハガ
ン二十四年といふ在位年数のみであつて、これは成化二十三年
にボルフ親王が歿したことを前提として始めて理解される年
紀である。（岡田氏・五二頁）

として、以下詳しくその没年について述べているが、その前提であるべきボルク親王の没年は既に述べたように岡田氏の説より十年以上も早く成化十二年ころであつて見れば、その根拠もまた失なわれたと見るべきである。

次に、ダヤン・カーンの出生年とか即位年齢についても触れておこう。明代のモンゴルに関心を持つ人は必ず一度

は蒙文資料によつて年齢などの試算を試みる。しかし、蒙文資料の数字は、干支の誤りなどの法則性を考慮に入れても合理的に解釈し切れないものがあり、少くともダヤン・カーンころまでは勝手に適当と思われる数字を採用するという所もある。私はこの点からこれまで極力意識的に数字については避ける方針を取ってきた。今でもこの基本的立場は変りない。

しかし、ダヤン・カーンについてはかなり客観的に行動が詳しく知り得る段階に到達しえたと思われるので、推測の域をでないが、これについて述べて見よう。

これまで私はダヤン・カーンの七才結婚を蒙古源流やアルタン・トブチの記載通り一つの基準として記してきたが、これは如何にも不合理で事実はこれと異つていたのであろう。その手掛りを同じ蒙古源流のダヤン・カーンの出生年にもとめると、同書では、バトムンケが甲申（天順八年、一四六四）、バヤンムンケが戊子（成化四年、一四六八）である。バトムンケはカーンとして明実録にでてくるのが成化十七年で十八才、イスマイルと分れて一軍の指揮官となつたのが同十九年で二十才。死んだのが同二十三年で二十四才ということ

になり、それ程誤りがあるとは思われない。ダヤン・カーン・バンムンケの結婚はさきに述べた通り、成化十六・七年ころであるから、生れたのが成化四年とすれば、当然十三・四才になる。長子のトロボロト、ウルスポロトの双生児が生れたのが、壬寅（成化十八年、一四八二）であるから十五才となるこれは少し若すぎるくらいはあるが、モンゴル社会では最低限として認容されうる年齢である。正式即位は弘治元年の二十一才の時、死亡は正徳十四年の五十二才。以上がダヤン・カーンの生涯といえよう。ダヤン・カーンの出生・死亡年に関しては、結果的には佐藤氏と全く同一で佐藤氏の説は妥当と思われる。

岡田氏は甲申の正当性を強調しているが、これはバトムシケの出生年であって不適当である。

ダヤン・カーンの事業については、私のさきの研究および佐藤氏の論文に基本的には加えるべきものはない。ただダヤン・カーンとオイラートや明朝との関係^⑧については修正補足すべき所があるが、これについては次の機会にゆづることにする。

むすび

ダヤン・カーンに関しては、蒙文漢文各十種類位の資料がある。しかも完全なものは一つも存在しない。出生・即位・死亡などの年次をとつても幾種類かある。それを一つ一つ分解して順列組合せ式に作りあげれば恐らく数十のダヤン・カーン像が生れるであろう。従つてダヤン・カーンをめぐる論争も活潑に行なわれる可能性は充分に存在する。要は各資料を分析批判して、最も妥当な解釈を施して決定されなければならない。

本稿において、私はこれまでの漢文資料による成果を背景に、蒙文資料をマンドカイ夫人に焦点を合わせて、干支などの形式からではなく、主な人物や事件の内容の分析から解釈してみた。その結果、今までの和田・佐藤・岡田諸氏の説とは異つて、ボルク親王はマンドグル・カーンの死亡以前に死亡した。その際に、バトムシケとバンムンケ兄弟は母シギル夫人とともにイスマイルの保護下に入った。その後、マンドグル・カーンと死別したマンドカイ夫人は政治的遺産を背景にバトムシケと結婚しようとしたが失

敗し、弟のバヤンムンケを手中に収めて結婚した。そして一時はイスマイルと彼の擁立したバトムンケ小王子とに対立して、モンゴリアを二分したが、成化二十二・三年にマンドカイ夫人側の勝利に終わった。結果的には、マンドカイ夫人の再婚が成功し、チンギス・カーン元朝系のモンゴル王国を再興して、夫人はこの王国の生みの親的存在になった。そしてこの王国の一族後継者たちは夫人を讚美するあまり、夫人の失敗や汚点を隠蔽ないし偽装して、恰も夫とバトムンケとの結婚を正当化するように説話化した。このために、ダヤン・カーンはバヤンムンケであるにもかかわらず、バトムンケなりとする説がマンドカイ夫人の美化に附随的に生れたことを述べた。

① モンゴル族の最高指導者を示す称号の表示は一定していない。例えば蒙古源流に記された文字を表示するにも *dayan khayn* などがあり、その外に単に *dayan* などもある。漢文の音訳でも汗・可汗・合罕・慈などがある。その外 *Khan Chaghan*。我國ではカン、カーン、カガン、ハガン、ハーン、ハンなど様々である。これは日本の仮名で表記しにくい音のために多様になった理由の外に、本質的には、モンゴリア自体において、時代により、地域によって異っていたであろうこともある。従って一概にどれが正しいとは言いつけない。またその外に、これらの使用法は同一の価値をもつ称号を示すものではないと

する説もある。例えば、*Lessing* の蒙古辞典によれば、最近の使用法として、*khayn* は大カーンを意味し、*khay* は小カーンを意味するとして、政治的地位の格差を認める。村上正二氏も同じ様な説を述べている。(『モンゴル帝国の成立と分裂』『岩波講座世界歴史』9)ただし蒙古源流ではダヤン *dayan* が *dayn* 位に即いたと逆な意味に解される場合もある。(注⑧の参照)いずれにしてもその表記と意味について最終的結論はでにくいまでも徹底的に調査してみる必要がある。私は先の論文ではカンとしたが本稿では蒙古資料を多く引く必要上カーンにしてみた。

② 和田清『東亜史研究』(蒙古篇) 東洋文庫 昭和三十四年。

③ 萩原淳平「ダヤン・カンの研究」『明代滿蒙史研究』京都大学文学部、昭和三十八年。

④ 松村潤「明代滿蒙史研究」批評、『東洋史研究』第二十三巻一号。

⑤ 佐藤長「ダヤンカーンにおける史実と伝承」『史林』第四八巻第四号。

⑥ 岡田英弘「ダヤン・ハガンの年代」『東洋学報』第四十八巻第三・四号。

⑦ 今更言うまでもないが資料は多ければ多い程良いというわけではない。労多くして功少しに止らず、労多くし誤り多い結果にもなりかねない。かえって混乱をきたす恐れが多い。要は信頼するに足りる根本資料を中心とすることが必要である。岡田氏は十種類程の蒙古資料をあげているが、結局今のところ重要と思われるものは蒙古源流とアルタントプチにあるように思われる。私は副題に蒙古資料の解釈を中心としてと記したが、その内容は前記二種に限った。

⑧ 蒙古源流 *Enden-ün tobci* は特別の場合を除いては、主として江実氏の訳注(京都、昭和十五年)によった。ただし、人名の表記や訳、とくに要約の場合は文意をそこなわない程度に改めた所もある。

⑨ バヤムンケの生年については、佐藤氏の指摘した通り（佐藤六二頁註⑥）、滿漢本蒙古源流にしかでてこない。蒙文本では、「ボルク親王は、その二十九歳の戊子の年から三年経って、三十一歳の庚寅の年にムンケら五人に害されて崩じた」とある。この文章では、二十九歳の戊子の年をだしながら、それが何を意味しようとしたか明かでなく、後述するように作爲によって、バヤムンケの出生を殊更削除したと思われるので、ここでは論述上滿漢本の説を採用しておいた。

⑩ アルタントブチ Altan buci は特別の場合を除いては、主として小林高四郎氏の訳注（外務省調査部第三課、昭和十四年、および同氏の生活社、昭和十六年）によった。ただし、人名の表記や訳、とくに要約の場合は文意をそこなわない程度に改めた所もある。

⑪ 和田清『東亜史研究』（蒙古篇）の三七九頁以下で李羅忽太子についてかなり詳しく述べているが、最も重要なボルクの死の時期に対する解釈は私と異っているので、ボルクの活躍の経過を示すために、資料的には重複するが、私も簡単にふれておいた。

⑫ 佐藤長「ダヤンカトンにおける史実と伝承」。

⑬ 田村実造「明代のオルドス——天順・成化時代」『東洋史研究』第十九卷二号。

⑭ 和田氏はこの資料を引用しながら伝聞の誤りとしてボルクの死を認めない（和田三九一頁）ばかりでなく、次にあげた成化十四年七月の李羅忽の死を報じた資料はあげないで、皇明經世文編の余子俊の上奏文を引用しながら、あたかも李羅忽は成化二十年ごろまで奮闘していたかのように記しているが（和田三九四頁）、これは誤りであろう。それと違うのも和田氏の考えの基底には、「源流の紀年は固より誤りであるが、此の辺は大体順繰りに違っているやうであるから、或は博勒呼濟農の死が滿都古勒汗の死より三年程後だということだけは事実で

あるかも知れない。」（和田三九六頁）のように蒙古源流を基準にしていたからであろう。また佐藤、岡田両氏がマンドグル・カインの後にボルクの即位を認めたもの和田説の影響があると思われる。

⑮ 蒙古源流のウネボロト王とアルタントブチのノヤンボロト王は同一人を指す。そのほか各写本によって同一人名の書き方に多少異ったものもあり、また引用した諸氏の研究論文中の引用文も各人によって表記の仕方が異なる場合が多い。表題や重要なような場合は原文を引用したが、その外では混乱を避けるために勝手に改変した所も少なくない。

⑯ 『蒙古世系譜』によると、毛札海王布庫博爾格太（別勒古色）之後、素有功于蒙古者也。とある。

⑰ 明実録成化三年春正月丙子（蒙古篇四・八三頁）には、毛里孩又殺死孛來、又新立一可汗。有驛羅出少師者、与毛里孩相讐殺。毛里孩殺死新立可汗。とあり、この一可汗は蒙文資料によれば、モラン・カインにあたる。

⑱ 明実録成化四年冬十月辛卯（蒙古篇四・一二六頁）には、巡撫宣府左僉都御史鄧寧等奏、朵顔衛千戶奄可帖木兒伝説、十月間、欲与毛里孩讐殺。とあり、その後翌年には故毛里孩とあって、四年に死んだものと思われる。（和田・三六八頁、参照）

⑲ 拙稿「明初の北辺について」『東洋史研究』第十九卷二二三頁。

⑳ 和田清『東亜史研究』（蒙古篇）七九八頁以下。更に詳しく研究したものととして、

青木富太郎「センゲの順義王承襲について」『東方学』十四卷。

同 「テュルゲの順義王承襲について」『中学雜誌』六十六卷

八号。

同 「ボショクトの順義王承襲について」『北アジア民族学論

集「二号」。

- ㊦ 蒙古源流によると、この対イスマイル戦に、ゲレボト (Gene Bolod) やゲレサンジヤ (Gene sanja) から十一汗 (皇子) にいたるまで皆イスマイルの擅まにふるまうを聞いて、とあるが、彼らはこの時にまだ生れていない。説話的に作爲されたものである。これに対して、アルタントプチでは、この戦いで活躍したトゴチングシやエセントウケル (Esen Tügen)、チャガンア (Cayan Ana)、チュブングアートル (Cubun Bayatur) など数名の大官武将らしき人名があげてあり、全力を尽した様子がうかがわれ、真実に近いと考えられる。
- ㊧ 拙稿「小王子に関する一考察」『東洋史研究』第十七巻第四号。
- ㊨ この戦は所謂天下分け目の決戦とも云うべきものであった。明実録を見る限り、この決戦まではマンドカイ夫人側については殆んど著しい記事はなく、専らイスマイルと小王子バトムンケ側の活潑な行動が記され、イスマイル軍優勢を思わせるが、結局、マンドカイ軍のトゴチングシの奇策と鉄砲の威力にイスマイルが敗死したと考えられる。
- ㊩ ただ一個所即位のときにバトムンケ・ダヤン・カーンとでてるがこれは前後の事情からみて、後に殊更付け加えたものと思われる。
- ㊪ この引用文の最後の所は重要な所であるから、所謂ウルガ本 (Erich Haenisch, Eine Handschrift des mongolischen Geschichtswerks von Sečen Sagang, Berlin, 1955) から「*ナーナイ*」して見るに、*Dayan qayan kemen neresyidan esi qatun-u emhine qan orun-a sayuyayad. (62 V) となり、*「カーン (qan) 位にいた」とある。注①参照。なお、この第一次即位は、内容から見て事実が即位と云う程のものでなく、正統性を貫くために後に誇張されて作り変えられたものと見ることもできる。

㊫ 蒙古篇三・四八四頁。

㊬ ウルガ本によって最後の部分をローマナイズすると、*Jayayatu en minu qan oron dur iyan sayuytu* となり、注②に「*qan*」二度カン (qan) 位にいたように考えられる。注③参照。

㊭ 岡田氏は「ダヤン・ハガンの年代」の最初の部分で、漢文資料の外圍伝について日本伝のことを引用して異民族に関する場合には誤った情報が紛れ込む率が甚だ高いことを力説しているが、日本と蒙古とを比較すること自体に疑問をもつ。云うまでもなく漢民族は匈奴以来千年以上も苦しめられ、白鳥庫吉氏によれば東アジアの歴史は南北民族の抗争史であるときえいわれ、事実明朝創立直前まで漢民族は約百年にわたってモンゴル族に征服支配されており、明代に入ってから英宗が捕虜になっている。明朝が如何に政治的・経済的 (防衛費を含む) に蒙古との関係に苦しんだかは『明代滿蒙史料』(蒙古篇) 十冊を見れば、一見して明らかで、到底日本との関係と比較できないことは明らかである。

また、「ダヤン・ハガンの時代には明と蒙古との間にあまり接触が多くなく、従って明人が蒙古の内情に関心を持つことも少かったことを忘れてはならない」と述べているが、これは如何なる根拠にもついたものであろうか。朝貢の使者もしばしば訪れ、降服者もかなりあるばかりでなく、時にはダヤン・カーンは五万・七万の軍を派遣して侵入掠奪し、その規模はエセンやアルタンにつくものであった。この防衛のために武宗はしばしば北方防衛拠点を訪れ、とくに正徳十二年には親ら応州において軍を指揮しダヤン・カーン軍と戦った。三日間の戦いのうち最後の日には八時間にわたり百餘合も戦ったという。これらについては、次の機会にゆずる。

(京都大学文学部助教授、)

Dayan Qaḡan and His Milieu

—An Interpretation of the Mongolian Sources—

by

Junpei Hagiwara

The incomplete and conflicting nature of the available sources has led to uncertainty and even controversy over the person and career of Dayan qaḡan. Careful comparison of the Chinese and Mongolian records, stressing personality and the significance of events rather than chronology, shows that the latter are overly centered on Dayan's consort, Manduqai qatun, and distort historical fact in glorifying her achievements.

The Dayan qaḡan of the Mongolian sources would appear to correspond to Batu möngke, but the historical Dayan qaḡan was actually the younger brother of the latter, Bayan möngke. Their father Bolqu ḡinong had already died during the reign of Manduqai's first husband, Manduḡul qaḡan. After the death of Manduḡul the family and its fortunes fell under the protection of Ismail, who succeeded in having Batu möngke made qaḡan. Disappointed in her hopes to marry the new ruler, the politically ambitious Manduqai settled instead for his younger brother, and for several years the two factions stood in opposition. In 1486-1487, however, Manduqai and Bayan möngke gained the upper hand, and in 1488 Bayan möngke was formally installed as Dayan qaḡan.

Manduqai thus played an important part in the subsequent restoration of the fortunes of the line of Činggis; and in the attempt to glorify her contributions the Mongolian sources have glossed over her short period of eclipse, making it appear that her second marriage was to the older brother, Batu möngke, and that it was he who then became Dayan qaḡan.